

のであつて、……資本と労働とを全く對等の關係に置いて取扱はんとするが如きは從來の所謂資本萬能の思想に比すれば固より一大進歩たるに相違ないけれども、又事業の點に於て労働調査、労働教育、職業紹介の如き何れも必要の事業たるには相違ないけれども、其所謂協調の基礎を何處に置かんとするか、又紛議仲裁の標準を何れに求むべきか等に就ては、實に重大なる疑問の存するのを覺ゆるのである。

第一協調と言ふ時に於ては、協調さるべき當事者が共に對等の實力あることを前提とする。實力之に伴はざれば、到底對等者として立つ事は出来ないのである。然るに今日我國に於ける資本労働の實情を見た時に、……最近に於てこそ少數資本家は著しく覺醒して、

労働者の人格を認めんとするの傾向があるけれども、多年の間労働者は全く資本に隷屬し其言ひが儘に服従せしを得なかつたのみならず、今日と雖も尚ほ多數の資本家の迷夢は醒むる事なくして、資本家の命、唯唯唯に従ふと言ふ状態に在る事を以て所謂我國固有の美風なりと稱して居るではないか。斯くの如き状態に於て如何にして眞實の協調が成り立ち得べき。……多數労働者の永久的團結の力に俟つに非ざれば、到底確實に其權利を全うし得ざる事實は歐米二百年の歴史の吾人に教ふる所である、而も本會は毫も労働組合に言及する所なきのみならず、其創立の動機並に時機より察する時は寧ろ其發達を緩和せんとするの傾向あることば、之を拒み難いのである。勞資協調會は斯くの如くに